

キリシタン美術と対抗宗教改革期のイタリア美術

児嶋 由枝 (上智大学)

対抗宗教改革(カトリック改革)期の16世紀後半から17世紀初頭にかけて、多くの美術作品が宣教師によって西欧から日本にもたらされた。また、日本においてもイエズス会が設立した画学校において西洋風の聖像が制作されている。こうしたいわゆるキリシタン美術作品の一部は現存しているが、そのほとんどは、来歴はもちろんのこと帰属や制作時期についてもいまだ詳かでない。また、1583年来日して日本で画学校を主宰したイエズス会士で画家のイタリア人ジョヴァンニ・ニコラオに関する謎にまつまされたままである。

こうした状況を鑑み、発表においてはいくつかのキリシタン美術作品をとりあげて制作者等の同定を行なう。また同時に、それらをイタリアにおける対抗宗教改革期の美術動向のなかに位置づけていく。

具体的には、先ず、福井で発見され現在は大阪の南蛮文化館蔵の油絵「聖母」像をシピオーネ・プルツォーネもしくはその周辺の画家に帰属する。プルツォーネの作品は、その単純な構図や独特の明朗な神秘主義的傾向から、「*arte senza tempo* (時を超えた美術)」とも呼びならわされ、対抗宗教改革期の最も典型的な美術とされている。プルツォーネのそうした要素が南蛮文化館の「聖母」像に認められるのである。

さらに、大阪府茨木の浮彫「ロレートの聖母子」がロレートで多くの仕事をしたサンソヴィーノ周辺の彫刻家の手になることを指摘し、同じく大阪府茨木の木彫「磔刑」と南蛮美術館蔵のブロンズ彫刻「磔刑」がロレートにあるジャンボローニャ作の磔刑像を原型とすることを論じる。ロレートは対抗宗教改革期のイエズス会宣教師にとって重要な聖地であり、日本宣教とロレートは当然ながら結びつくのである。

また、ジョヴァンニ・ニコラオの経歴についても検討し、彼が対抗宗教改革期ナポリの地方様式を身につけていることを明らかにしていく。すなわち、日本で最初に教示された西洋美術は対抗宗教改革期ナポリの独特な様式を反映していると考えられるのである。

ローマのイコン「*Salus populi romani*」が原型と確認されている東京国立博物館蔵の銅板画に関しても、初期キリスト教時代のイコンが対抗宗教改革期に特別な崇敬をあためていたことと関連づけて論じたい。

そして最後に、こうした対抗宗教改革期のイタリア美術の影響を色濃くとどめる作品が当時の日本においてどのように受容されたかについても言及する。そこでは、南蛮屏風に描かれている“西欧風”の聖像の表現に注目し、それと対抗宗教改革期の美術との関連について検討していく。